

Abstract: 本報告では、「経済学史研究とテキストマイニング」と題して、伝統的なテキスト解釈学に、「計量テキスト分析」という新しい方法を導入する意義・現状を述べる。東北を拠点に持つ共同研究の成果を紹介した後、テキスト解釈の方法論的基礎として、合理的再構成・歴史的再構成に加えて、全体的再構成という三種類を紹介する。また、Blau (2015) 「捜査活動としての政治思想史」で犯罪捜査に異なった種類の証拠集めが必要とされたように、思想研究でも、伝統的な解釈学に加えて、テキストマイニングという自動探索型、**cording rules** という仮説検証型という異質な方法が紹介される。これらを合わせた「計量テキスト分析」において、4つの型を提唱した上で、実例が紹介される。

Type I: 単独の著書の内部のみ。**Type II:** ある著者の時系列的变化。異なったトピックにどれほど連続性があるか。**Type III:** 同じテーマまで違う著者。言わばクロスセクション。

Type IV: コーパス（関連する言説空間、ミドルデータ）におけるある著作の影響。

最後に、こうした分析の重要な仮定が2つある（言葉の袋仮説、分布仮説）ことを承知した上で、ミドルデータ（熟読できる規模と、全く把握できない規模の間）を構築する段階まで来ていることが紹介される。ただし、それはウェブ情報の抽出、トピックモデルの実装という困難な領域でもある。